

第1 特集

向精神薬処方の勘どころ プライマリ・ケア医と精神科医と薬剤師のクロストーク

向精神薬処方の際を、適切な温度感で超えよう

向精神薬は日常診療において頻繁に出番に遭遇する薬剤でありながら、プライマリ・ケアに携わる医療者が苦手意識をもつ薬剤クラスの1つだと思われます。薬剤自体に一定の効果が期待できる一方で、副作用や依存のリスクもあり、薬剤処方の適応の見極めや薬剤ごとの微妙なさじ加減など、使い慣れない医師にとっては悩ましいところです。とくにプライマリ・ケア医としては、向精神薬は精神科領域の専門的な薬剤という認識が根強く、自分が処方してよいものかどうか、そして結果的に専門科の医師へ紹介することになった場合に診断や治療の妨げになるようなことはないだろうか、といった心理的なハードルを感じることも少なくないと思われます。そのため、使うべきか敬遠すべきか迷いながらも、患者と向き合わざるを得ない場面がしばしばあります。

本特集では、プライマリ・ケア医、精神科医、薬剤師という異なる専門性をもった専門職が、うつ病、不安症、睡眠障害、せん妄など、高頻度な疾患・病態に関してそれぞれの視点から「勘どころ」について語り合います。プライマリ・ケア医や研修医の立場からは、普段なかなか精神科医や薬剤師に直接聞きにくい素朴な疑問も、この特集を通じてカバーされるかもしれません。一方で、プライマリ・ケアというセッティングに特有の課題や診療のコツは、とくに普段の診療が病院における専門診療を中心とされている専門医からは見えにくいものであり、プライマリ・ケアの専門家の視点から得られる学びもきっと大きいでしょう。

本特集号を通じて、読者の皆様が「向精神薬処方」にもう一步自信をもち、皆様のかかわる患者さん達へのケアの向上につながる一助となれば幸いです。

編集幹事

聖マリアンナ医科大学／川崎市立多摩病院 総合診療内科
日本プライマリ・ケア連合学会 メンタルヘルス委員会

家研也